



た時代に、果敢に就職活動をしてシステムエンジニアになった。たまに帰って来て話してくれる就職活動の話や、ＩＴ業界の話にはびっくりさせられる。新聞に書いてあることは本当だったのかと妙な感心しながら聞いている。それにも増して感動的なのは、わが娘の「たくましさ」である。今は仕事で面白くて仕方ないのだろうけど、体だけは大切にね。そして二男が今年就職した。この子もいろんなことをやってくれたのだが、私たち夫婦は、一応肩の荷が下りた気持ちだ。

実はこの３人、すべて中学時代に不登校になり、新潟市内の単位制高校に進み、大学に進学した。忙しすぎる親に育てられ気の毒なことをしたと思わないわけでもない。でも三者三様、しっかり生きていることは何より嬉しい。先生方には深く感謝したい。

３人を育ててみて思うことは「やっぱり子育ては面白い」そして安心して生み育てられる社会を、皆様と力を合わせて作りたいと強く願う。（さかい きみこ・新潟県医労執行委員長）

専修学校から見た 高校教育の現状

三ツ井富士夫

知人の専修学校長から昨年、四月に入ってから急に「物理概論」の講師を頼まれ、多少の好奇心もあり引き受けることになり、惑いながらも一年が過ぎた。

私のかかわる学生達はほんの一部に過ぎないが、これまでの多くの高卒生を専修学校に送り出して来たこととあわせて、専修学校から見た高校教育の問題点、あるいは自らの反省を課題提起的に述べてみたいと思う。

以前にこの『教育情報』（二〇〇五・三発行八一号）で報告したように、本県の専修学校への進学率は全国一位で、高卒生のおよそ三〇％である。一部の有識者や県教委（あるい

にいがた

北から南から



は県高校教育課）は、専修学校への進学率の高さを「受験学力がつかなくて大学進学をあきらめて」や県民の（時代遅れな）「実学志向」のためなどと、好ましくないものにとらえている。しかし、この指摘は当を得ておらず、県の産業構造（中小企業が多い）や県民の所得レベル、地元就職志向などの反映と見るのが妥当で、今日では県内企業や地域をになう若年層のかんりの部分を専修学校生が占めているというのが実態である。

専修学校の講座を担当してみても、いかに彼等が高校教育で（小・中学校でも）スポイルされ必要な知識・学力（能力）を身につけられなかったかを実感した。前掲の『にいがたの教育情報』八一号で、長井芳朗氏が指摘した「普通科のカリキュラムが戦前から、…社会常識よりも数学や英語の高い学力を要求する『一流大学』受験に対応するものになっている」「『競争の教育』から離脱した子ども達にとつては『受験教育のための学習』では意欲がでません。自分の生活につながる学習をベース

にした新しいカリキュラムを作り出すことが今後求められている」ということを目の当たりにした気がする。今日では、商・工・農の専門高校や総合学科の高校までもが、大学受験に傾斜しがちである。

今日の専修学校は、仕事（産業）や生活からかけ離れた高校教育と実社会との橋渡し役になっている。高校教育で身につけなかった仕事や生活に直結する技術・技能教育をになっているという側面も否定できない。高校では（専門高校でも軽視されがちな）経験しない、資格検定への取り組みを通じて、自動車免許取得とも共通する「実社会にかかわっている」という充実感を専修学校生は感じているように思える。普通高校では味わえない「つくる楽しさ」「仕事（労働）への意欲」などを専修学校で得ているという面も大きい。

こういう専修学校の役割や実態を理解していた高校教員は私も含めて少ない。ましてや専修学校進学や就職に必要な教科内容のあり方を考える普通科のカリキュラムは皆無と言



つてよいのではなからうか。

例えば、小数や分数の計算などで「落ちこぼされた」子ども達は、高校でも回復する機会もなく卒業している。そういう生徒達が専修学校にも少なからず入学している。また、私もこれまで深く考えなかったが、高校物理の内容は、抽象的（一般論）すぎて、余程深く理解しなければ工業系専門学校生や技術系就職者には基礎知識として役立たないことと、役立てられる程指導もされていないことを痛感した。恥ずかしながら、工業高校で習う工業基礎としての物理内容の方が内容的にも高度で学びやすいものであることを最近になって知った次第である。

現状ではそう簡単にはいかないであろうが、「誰に、何のために、何を、どのように」教育する（教える）のか、高校のカリキュラムレベルで、教科指導レベルで問い直す必要があると思えるがどうかであるうか。

（みつい ふじお・新潟市、専修学校講師）

一〇年の時

—時は巡る—

熊谷直樹

4月、桜の名所大河津分水河畔の分水高校に転勤となった。

新しい赴任地は私がこれまで経験してきた定時制高校や黒埼高校のような学校とは違い、教室に入ると常に40人全員がそろっている。欠席はほとんどなく、部活動も盛んで地区大会では野球部が19年ぶりに県大会出場を果たし、女子テニスでは個人戦決勝を分水選手同士が競い合いまた体操競技でも男子団体・女子総合など好成績を収めている。また他校には見られないホッケー部やカヌー部といったマニアックな部活も入部希望者が殺到する。私自身はそんな分水高校の実態は全くわか